



幼児期のトラウマの理解と 保育士・教師の支援と対応

講師：竹内 吉和さん 竹内発達支援コーポレーション代表

今回の研修は愛着障害、発達障害をキーワードに、虐待とトラウマについて話します。

【事例紹介】

「心理的虐待から愛着障害、そしてギャンブル依存になったAさんの事例」

「心理的な虐待」は後々の人生に大きな影響を与えることがわかってきています。

【この15年間の特別支援教育について考える】

特別支援教育制度によって、複数の障害種別を対象として教育できるようになり、発達障害の子どもたちも通級による指導の対象となりました。制度は整ってきましたが今、成果が問われています。

【親にとってわが子の障害を受容するということについて考える】

障害受容は、ショック⇒否認⇒怒り⇒適応⇒再起のような段階を経ます。発達障害は明確な証拠があるわけではないので、ほとんどの場合、受容するのに時間がかかります。保育士・教師は親との人間関係を築いて、親の思いを聴きながら支援していくこと、子どもだけでなく親への支援も重要です。

【「児童虐待」「ヤングケアラー」「愛着障害」「発達性トラウマ」について考える】

「児童虐待」は、そのハイリスク群を知り、早期発見が重要です。「ヤングケアラー」は、児童虐待に近い概念と捉えています。孤立していますので、周りの大人が気付くことが大切です。「愛着障害」の子どもは、安心感がない状態で育っているので愛着形成がその対応となります。「発達性トラウマ」は、幼少期から続くトラウマによるストレスや緊張にさらされる（多くは虐待が原因）ことで起こる、心身の不具合です。対応が難しいので、予防が大事です。

【親への支援について考える】

「二八の療育」（清水康夫先生）と言われます。子どもへの対応は2割、親への支援は8割ということです。親への支援とは、今の状態の中で、褒めていくことです。例えば、保育園に連れてきたことを認めて褒めることが親への支援となることがあります。

「発達性トラウマ障害」は発達障害、愛着障害とも違いますが、非常に近い位置にあります。診断名ではありませんが子どもの状況を理解するのに重要な概念です。主な原因は虐待ですので、早期発見、予防、親への支援が重要です。

アンケートより

発達障害、愛着障害、発達性トラウマ障害の違いが分かるようで難しいと感じた。最後のエピソードは本当に感動的、子ども親もいいところを見て褒めたいし、褒めてほしいと感じた。

愛着障害について学びたく受講しました。保育者の関わりでも形成修復可能と聞き、これからも愛情をもって一人一人に関わっていきたいと思いました。



愛着障害と発達障害について、具体的な事例もあり、とてもわかりやすかったです。当てはまる生徒がいて、その生徒に対する見方が変わりました。

勉強不足のところもありすべてをかみ砕けていないかもしれませんが、今後も子どもたちやそのご家庭へのサポートを考え続けていきたいと思っています。

DVD貸出中